

平成 30 年度第 2 回向日市いじめ防止対策推進委員会

- 1 日 時 平成 31 年 2 月 12 日 (火) 午後 1 時～同 3 時
2 場 所 乙訓総合庁舎 1 階 第 2 会議室
3 出席者 本間委員長 大学教授
平 委員 弁護士
北口委員 臨床心理士
荒井委員 臨床心理士
(事務局) 向日市教育委員会 学校教育課 野田担当課長、藤野主幹

4 内 容

(1) 平成 30 年度第 2 回いじめ調査結果の概要について

◆資料を基に説明

①いじめ調査 1 回目の追跡調査の結果

- ・解消件数 小学校 7 6 4 件の内、6 8 9 件、中学校 8 2 件の内、6 7 件
- ・未解消は、引き続き指導、支援、見守りをしている。

②いじめ調査 2 回目の結果

- ・認知件数 小学校 6 8 8 件、中学校 1 0 0 件、小中合計 7 8 8 件
- ・未解消件数 小学校 6 6 6 件、中学校 6 9 件、小中合計 7 3 5 件
- ・解消件数 小学校 2 2 件、中学校 3 1 件、小中合計 5 3 件

③いじめ調査 1 回目との比較

- ・認知件数 小学校 7 6 件減、中学校 1 8 件増

④学年別認知件数の傾向

- ・昨年度と同様に、小学校低学年が一番多く、中学 3 年生まで学年順に減る。
- ・しかし、今回は、中学校 1 年生の認知件数が 6 年生より多かった。

⑤いじめ調査 2 回目の未解消件数の内訳

- ・小学校 6 8 8 件の内、見守り 3 0 6 件、要支援 1 2 1 件、要指導 2 3 9 件
- ・中学校 6 9 件の内、見守り 3 2 件、要支援 2 5 件、要指導 1 2 件

⑥いじめ調査 2 回目の認知されたいじめの態様

- ・小学校中学校ともに、3 つの態様「冷やかしからかい、悪口や脅し文句、嫌なことを言われる」、「軽くぶつかられたり、遊ぶふりをしてたたかれたり、蹴られたりする」、「仲間はずれ、集団による無視」が、いじめの態様の中で多くを占めている。

(2) 質疑・協議

(委 員) いじめ調査結果の中で、中学校のいじめの態様状況で①②③が増加傾向なのは、中学生が幼いような気がするがどうか。

(事務局) 1 回目調査では、見られなかったもので、幼いというよりも、いじめの態様の増加した内容から、アンケートに嫌な思いがあったことを素直に伝える中学生が多かったのではないかと考えている。

これまで、もしかすると挙げられなかったような事象も回答したと考えられる。

(委 員) いじめの行為が、社会で考えると触法行為であることもあり、中学生であっても触法行為につながることを教えることも必要となる。

また、加害の子どもが、いらしている状況もあるのではないかと考えられる。最近の子どもは、睡眠障害がありイライラにつながっていることも考えられる。

(委 員) 被害側で、特に親の不安が大きいことがある。子どもの状況について、正常な範囲で判断できない時に、SC として話を聞くと、親の不安が大きいことが分かり、そこで親に何か提案をすると怒りが大きくなることもある。だからといって、その時に言われるがままに受け入れると、小学校から中学校、中学校から高校へと要求が大きくなることもある。早い段階での解決の道筋がつけられる方がよい。

(委 員) 積極的に認知を見つけていくことが大切。解消件数も数がどうなのではない。定義を変えたことによって経年の数に差が出る。また、解消率が低いからと言って問題ではなく、どのように事象を見ていくかが大切なところである。

認知された中に、重大事態に結びつく事象はあるのか、リスクが高い事象はあるのか。
(事務局) 重大事態につながる、またそのリスクのある事象は、あり、各学校で丁寧に対応をしている。

(委 員) 予防的な取組についても議論する機会を設けたい。事象をカバーしている取組には、どんなものがあるか。組織的にやっているのか。例えば「命の教育」とかどうかな。

(事務局) 「命の学習」など、継続して行うなど、各学校で状況に応じた取組を行っている。

他の地域とかで、子ども同士の関わり方で、学ぶことのできる取組はあるか。

(委 員) アサーションの取組を全体指導や個別指導に取り入れるなど様々な方法で取り組まれている学校もある。

相互に認め合う取組や、SC も活用した取組など、状況の応じた実践例がある。